大正期に於ける日光東照宮寛永造替工期の訂正と当時の東照宮評価

THE STUDY ON THE CORRECTION OF NIKKO TOSHO-GU KANEI ZOUTAI TERM IN TAISYO PERIOD AND THE ESTIMATION OF TOSHO-GU AT THAT TIME

内田 祥士*
Yoshio UCHIDA

In the Taisho Period, there is the correction of Nikko Tosho-gu Kanei-Zotai term.
In this correction the term became 1 year and several month from 13 years.
This study is to make clear the change of estimation about Tosho-gu through this correction.

Keywords : Modern, NikkoTosyogu, Ito Chuta, Oe Sinterou, Hiraizumi Kiyoshi, Okuma Kiho
近代、日光東照宮、伊東忠太、大江新太郎、平泉澄、大熊喜邦

1. はじめに

歴史的建造物の評価は、その竣工年代が訂正されると見直しが必要になる。しかし、竣工年代は変わらず工期や予算が訂正された場合、その訂正によって建築の評価はどの様に見直されるのだろうか。大正期に行われた日光東照宮寛永造替工期の訂正は、その工期を、十数年間（後に13年間）から一挙に1年数カ月に短縮するものであった訳であるから、近代に於ける日光東照宮の評価を考える上でも重要な契機であったと同時に、より広く工期と建築評価の関係を考える上で示唆に富んだ事例である。

日光東照宮寛永造替工期の訂正を最初に主張したのは平泉澄であるが、この経緯については、田辺泰の「日光廟建築」^{註01}や大熊喜邦の「江戸建築叢話」^{註02}等によって既に整理がなされている。しかし、訂正の影響や、それによる評価の見直しについては、既往の研究を見出せない。そこで本論では、この訂正が当時の東照宮評価に及ぼした影響を検証する。

さて、本論が問題にするのは日光東照宮に対する建築的评价で、家康信仰ではない。しかし、明治初期においては、専門家と言えども自らの東照宮観を自由に表明することは困難であったと考えるべきだろう。特に、賞賛には些かの躊躇を伴ったに違いないのであって、この点について若干言及しておきたい。

大正15年に刊行が開始された「神佛分離史料」^{註03}や、同年発行の石井研堂著「増訂明治事物起源」^{註04}の記述から、「神佛分離史料」が東照宮三百年祭記念会の研究費補助によって刊行されたことを考慮しても、大正期には既に自由な立場からの評価が可能になっていたことは明らかである。しかし、問題は何時頃からそうした環境が整ったのかである。この点について濫澤栄一が「徳川慶喜公傳」に記した自序の以下の部分を参照したい。

この自序は大正6年6月に執筆されたものであるが、これによる

と、濫澤が旧友福地櫻痴と「明治二十六年の夏秋の頃、帝國ホテルに催された或る宴會の後」^{註05}に話した時には、福地が考えていた幕府の歴史や、濫澤が残そうと考えていた徳川慶喜の伝記を、表だって編纂刊行することには、未だ大いに躊躇があった旨の記述がある。しかし、徳川慶喜の伝記は濫澤の努力にも関わらず「其後十年の歳月を経ても成就せぬのみならず、福地氏が没せられ」^{註06}たので「三上参次博士に相談して、荻野由之博士に其主任を依頼する事になった」^{註06}のだが「荻野博士に依頼した頃は、計畫の當初に比ぶれば時勢が大いに變化し、公も東京の御住居になって、宮中へも時々御参内なされ、明治三十四年には壽香間祇候となり、三十五年には公爵を授けられて特に一家を立てられ、従って社會的交際も出来て云々」^{註07}とあるから、明治30年代には徳川時代についてかなり自由に発言出来る環境が整っていたことになる。従って、東照宮については、更に早い段階で自由であったと推察される。

以下本論では、寛永造替について、まず明治30年代から訂正の議論が始まった大正10年までの時期の一般的見解を確認し、その下での識者の東照宮評価を通観する。その後、訂正の経緯を概観し、訂正後の同じ識者の東照宮評価を、訂正以前のそれと比較し、訂正が彼らの東照宮評価に与えた影響を検証する。

2. 「通説」とその下での東照宮評価

2. 1 「通説」

明治以降、東照宮に関する建築学的な言説としては、明治30年4月に建築雑誌に掲載された塚本靖の「日光廟建築裝飾概論」が最初のものである。これは学会での演説記録で、その後、明治36年に塚本靖と大沢三之助と連名で「日光廟建築論」^{註08}が刊行された。ここでは、明治36年という年代と正式な報告書であるという点から「日光廟建築論」を用いて当時の寛永造替に関する見解の概要を

* 東洋大学工学部建築学科 助教授・修士(工学)

Assoc. Prof., Faculty of Engineering, Toyo Univ., M. Eng.

確認する。

さて同論「第四編 日光廟草創ノ年代」に「寛永時代ノ建築ガ如何ニ大事業ニシテ、如何ニ鄭重ナリシヤハ、當時ニ於ケル種々ノ古文書布達等ニ徴シテ明キラカナルノミナラズ、今日ニ於テ現存スル建築ヲ見ルモ、當時此建築ニ関係シ、工事ニ従事シタル者ガ如何ニ經營慘憺心血ヲ瀦テ、爰ニ此東洋ノ一大偉觀ヲ呈セシムルニ至リタルヤノ形跡ハ、歴々實物ニ於テ指摘シ得ベキニ於テヤ、當時旭日沖天ノ徳川氏ノ聲威ヲ以テシ、賞ヲ數百ノ諸侯ニ徴シ、千萬ノ工匠ヲ役シ、前後十數年ノ星霜ヲ費シタルヲ見ルモ、事ノ極メテ重且大ナルヲト知スルニ足レリ」^{註9}という記述がある。

ここに言うところの、資金を「數百ノ諸侯ニ徴シ、千萬ノ工匠ヲ役シ」た上で「前後十數年ノ星霜ヲ費シ」て完成したとする説、即ち、寛永造替は十數年（後に13年間）に及ぶ工期と全国の大名から集めた莫大な資金によって実現したとするのが、大正初期までの一般的な見解となったものである。この見解を以下「通説」と呼ぶことにする。更に、この事は、歴史的資料のみならず「實物ニ於テ指摘シ得ベキ」ものと考えられていた点にも言及しておきたい。

この「通説」がいつ頃から人々の知るところとなっていたかは今問題にしないが、その後訂正の行われた大正期まで、東照宮に関する評価や修理は、全てこの「通説」の下で行われた。

次にこの「通説」の下で東照宮評価について言及した建築家として、伊東忠太と大熊喜邦、建築史家として関野貞、そして深く修理に携わった建築家大江新太郎らの言説を取り上げて、「通説」の下での東照宮評価を確認したい。以下の各言説は、既に繰り返し取り上げられているので、本論ではその内容についての詳述は避け、各言説と「通説」との関係に絞って通観する。

2. 2 通説の下での東照宮評価

伊東忠太

明治期の伊東忠太の東照宮観については、丸山茂^{註10}が既に明らかにしているが、ここでは、その代表的なものとして「見廟建築の美を論ず」^{註11}と「日光」に掲載された「美術より觀たる日光」を取り上げる。^{註12}

「見廟建築の美を論ず」

本論は明治40年1月に国華第十七編第二百號に掲載されたものである。その緒言で「余屢々晃山に遊び、其社殿を觀る毎に、其建築の形式手法の特性を考査し、畧は其要領を得たるを覺ゆ、即ち試に其梗概を述て識者の教を乞はんと欲す、然れども之れ素より余が今日の程度に於ける余の感想を標準とするもの、敢て晃山建築の真相を看破すと云はず、其殿門箇々の建築に就いては、他日稿を更めて詳論せんことを期す。」^{註13}と述べた上で「日光廟建築の傳記及記載は塚本靖、大澤三之助兩君著日光廟建築論（東京帝國大學紀要工科第一冊第二號）に詳なり」^{註13}と付記しているから、これは「通説」の下で、伊東が東照宮を観察して書いた感想である。（三）配置の錯列（四）規模の矮小といった表題にも表れているとおり、感想とは言え、総じて極めて批判的な内容である。更に（十）結論では「以上論ずるが如く、見廟建築が幾多の缺點を有するは争ふべからざる事實なりと信ず、人或は曰く、日光建築の缺點は即ち同時に其長所なり、蓋し斯の如き空前の創意を以て縦横經營するに當りては、往往常規の外に逸するものあるは素より其數なりと然れども

所謂創意なるものは、實は明式の直寫に歸すべきもの多し、余を以て之を見れば、則ち之れ明式の適用を誤り、所謂濫用に陥りたるものなり」^{註14}と明言している。尤も、最後に「其意匠や豊富、其技工や精緻、彫鏤巧を極め、傳彩美を盡し、以てこの驚くべき建築を大成す、洵に空前の現象なり、之を本邦無二の國寶と認むるに於て素より毫も不可なるを見ず」^{註14}という感想を漏らしている点には一応触れておきたい。この論述には、実は工期や予算への言及が一切ない。従って、この感想は、通説を前提としてはいるが工期や予算によって相対化されたものではない。

「美術より觀たる日光」（「日光」^{註15}より）

この本は、大正四年二月十七日、並に十八日の兩日、東京の南葵文庫で開かれた史跡名勝天然記念物保存協会第2回講演会の記録である。^{註16}大正4年と言えば東照宮三百年祭の年であり、南葵文庫の庫主は徳川頼倫である。^{註17}

さて、伊東忠太は、その冒頭で「日光建築が、果たして俗悪なるものであるか、或は善美を盡したものであるかを解決して見度いと思ふ」と述べた上で、工期について「其後御承知の通り、三代將軍家光公が寛永元年より改築に着手されまして、寛永十三年に其改築が落成して居るのであります」^{註18}と述べ、社殿の建築について「十三年間の継続工事でありまして、之に要しました工費、材料等は、総て秋元家に傳はつて居る、御造営目録に依つて、明細に分かるのであります。それは一々申しませぬが、莫大なる費用と、非常なる精力とを以て、十三年間、辛苦經營の結果、終に美事に出来上りました。」^{註19}と記している。その後、実際に建築関係者がどのような打ち合わせを行ったかは不明であるとした上で、出来上がった姿から推察すると寛永造替の方針として「九箇条」^{註20}を上げることが出来ると述べている。そして、その方針と実際の東照宮との関係の分析に入る前に予めこう言っている。「此九箇条の方針が確立され、さうして此方方針通りに出来たならば、実にそれこそ善美を盡したもので、一点の非難を入れる余地のないものが、出来なければならぬのであります。所が、実際は其所まで行つて居らぬと思うのであります。大分考え違ひをした点もあるやうであります。若し又予定の方針通りに、実行されたとしても、長所には必ず常に短所が伴ひます。絶対に短所の無い建築は、決して有り得ないのでありますから、日光の建築も、その長所の一面には、短所も有る訳であります。併し其短所を指摘するのは、今日の御話しの目的ではないので、今日は日光建築の性質や、価値に就て、自分の所存を申し上げれば、則ち足るのであります。」^{註21}これは、国華に掲載された「見廟建築の美を論ず」よりも遙かに柔らかな表現になっているが、それを控えめながら継承していることを示唆している。ただ、前日に辻善之助の講演^{註22}があったことは念頭に置くべきだろう。

伊東の主張を要約すれば、莫大なる費用を投じ非常なる精力を以て、十三年間、辛苦經營の結果、終に美事に出来上がったが、善美を盡したのものには成らなかったということである。ここでの伊東の評価は、通説の工期と費用を重要な根拠として成立している。或いは、工期と費用によって相対化されている。

大熊喜邦

大正10年1月発行の「趣味の建築叢話」に「建築上より見たる日光廟」^{註23}という章がある。冒頭で「日光は我國の人々の自慢であり誇りである。日光は日本の日光でなくして世界の日光である。

然し如何に中禪寺湖の風光が明媚でも、華厳湖の瀧が壮大でも日光から日光廟を取除ては結構というふことは出来なくなる。」^{注24}と述べた上で「日光廟は、常時國帑を傾け、天下の力を極め、海内の名工を集め、盛んに經營したものである。」^{注25}とし「寛永元年家光公再興の志を懷き松平右衛門太夫正綱、秋元但馬守泰朝を總奉行とし、名工甲良豊後守宗廣を總棟梁とし、從來の殿宇を毀ち規模を擴張して盛に社殿を造營して、寛永十三年に功を竣つたのが今の東照宮で云々」^{注26}と記している。通説を前提とする東照宮評価ではあるが、「通説」は婉曲的な補強として記述されており評価の直接的な根拠として重視した言説ではない。

関野 貞

もう一つ大正2年、工業大辭書に発表された関野貞の「徳川時代の建築」^{注27}を取り上げておく。極めて客観的で簡明な記述である。冒頭で「是れ當代に於ける最壯麗にして、最完備せる代表的靈廟建築なり（中略）寛永元年將軍徳川家光更に大に規模を擴張して改築を企て、甲良宗廣を總棟梁となし國帑を傾け天下の力を極め海内の名工を集め盛んに經營し、寛永十三年四月に至り功を終る。」^{注28}と述べた後、主要建築物を列記し、最後に「蓋此廟は當時の技術家が全力を極盡して經營せし者にして、其殿堂門廡は或は髹漆を以て、或は金繪を以て或は彫刻繪畫を以て、或は飾金具寄木細工を以て裝飾し、其奢麗古今此儔を見ず、施工の精美、手法の新奇、匠匠の豊富、實に當代初期工藝の精華を集めて之を大成せる者なり。唯規模の小なると手法の繁縟の弊に陥りたるを惜しむべきのみ」^{注29}と述べている。関野の評価もまた、工期や予算が前提になっている。しかし、工期や予算と東照宮評価との結びつきはあまり意識されていない。むしろそれぞれ独立した史実として並記されるに留まっている。

大江新太郎

大江新太郎は、通説の下で最も深く東照宮修理に関わった建築家である。そこで、本論では修理に絞って検証したい。大江は「日光東照宮精算書」^{注30}の連載冒頭に記した「緒言」で「同宮の造営は、寛永元年正月から始まつて同十三年四月に舉つた」^{注31}と記して、自らが「通説」を前提に修理に当たっていたことを明らかにしている。

具体的な修理内容については「日光廟修理辯疏」^{注32}を参照したい。この連載の目的は「日光廟大修理に對する世間の誤解を辯疏せむ」^{注33}ことで、修理に対する批判に答え、その正当性を世間に知らしめようとして書かれたもので、復元か凍結保存かという問いに對する修理に携わる者としての解答でもある。この中で大江は「日光廟修繕の根本方針は、桃山と江戸の両時代に跨る過度期様式の建築を、之に何物を加ふる事もなく、何物を減ずる事もなく、其儘に保存して、造営當初に表はれた原作意匠を、後人に傳へやうとするに外ならぬ」^{注34}と述べ「尤も、各種技工の隠れたる実施仕様に就ては、向後の保存耐久力に稽へ、又経費の奈何を參酌して、必ずしも昔の儘の仕様に倣ふことの出来ぬ場合も起つて来る」^{注34}と断った上で、それは「舊幕時分に仕来つた二十ヶ年目御修復の制定と御入用御構なしの特典とがない以上、今日の場合又止むを得ざる事柄である。」^{注34}と結んでいる。大江の考えは、十数年に及ぶ工期と莫大な資金によって実現したとされる寛永造替の姿は、その後定期的に行われてきた修理によって守られてきたが、幕末から明

治初頭の混乱の中で修理が途絶えたために現状の様な姿になっている、しかし今なら過去の修理の痕跡から、寛永造替の莊嚴へ辿り着けるといふものである。そして、そのために要する期間は、現在の修理の環境では「前後合はして工期が二十五カ年間継続する訳である」^{注35}といふものである。大江にとって、通説の費用と工期は、既存の建築仕様を分析する上での重要な根拠になっている。

以上、通説下での専門家による東照宮評価を確認した。彼らの評価は全て通説の下にあるが、常に「通説」を評価の重要な根拠として扱っていた訳ではない。伊東の評価は、国華の論考では、工期にも予算にも言及していないが、「日光」では、工期と予算によって相対化されている。大熊の評価は、通説を前提とはしているが、評価の根拠として重要視した記述ではない。関野の言説も同様である。また、東照宮に対する評価自体は、伊東と大熊は対照的である。一方、大江新太郎は、既存の仕様を、通説の工期と予算の結果と認識し、その後の修理も同じ条件で行われてきたとの視点に立って修理に当たっている。

この「通説」に、決定的な批判を加えたのが平泉澄であった。

3. 寛永造替工期の見直し

平泉説

平泉澄は「通説」に対して、大正10年2月、史学雑誌に「誤られたる日光廟」^{注36}を発表して異を唱えた。平泉はその冒頭で「予は昨秋一たび明治聖徳記念學會に於て、再び我が史學會に於て、この問題を提げて聊か卑見を演べた。」と記しているから、2回に渡る口頭発表を経て後の滴を持しての論文である。平泉は「通説」を、殆どあらゆる点から「誤りたる」と批判したのであるが、その概要をまとめると下記の様になる。

	通 説	平泉説
一	この造営は寛永元年に始まり、同十三年に至つて竣工した。即ち建築工事に十三年の歳月を費したのである	この造営は寛永十一年冬に始まり、同十三年春に至つて竣工落成した。其間歳月を費す事僅に一年有半。
二	幕府は松平右衛門・秋元但馬守泰朝の兩人を奉行となし、便宜により隔月若しくは半年毎に交代して、一人は日光に止り、一人は江戸に在つて將軍に近侍し、相連絡して工事を監督する様に命じた。	幕府は秋元但馬守泰朝を以て造營奉行とし、島四郎左衛門・庄田小左衛門等をして之を補佐せしめた。
三	之に要する費用は之を天下の諸侯に課し、極めて多額の金銀を徴発した。	之に要する費用は悉く幕府自ら支出した。其総額は決算報告の示す所、金五十六萬八千兩、銀百貫目及び米千石であった。
四	其等の課せられたる費用以外に、諸侯は尚多くの寄附獻上をおこなした。	諸侯はひとりこの費用を分担しなかったばかりでなく、其他に於ても何物の寄附をもしてゐない。
五	家光將軍がこの大造営を企てた目的は、一は祖廟を莊嚴にして幕府の威光を増し、一は諸より蓄財を奪ふて復讐を思ふ能はざらしめるに在った。	この造営は實に家光の東照宮に對する信仰より出たものであつて、寛永十一年九月の社参が其動機となり、式年遷宮の故実が其理由となつてゐる。
六	工事の継続は前述の如く十三年に亘り、全国より幾千の工人を徴集したのであるが、其施工の準備及重工の順序等整然として完備し、規模の雄大なると方法の組織的なとは意想外の感がある。	工事の規模組織は明らかでないが、旧説の伝ふる所は信用し難い。

そして「新旧兩々対比すれば、何たる著しい相違であろうか。それは實に根本的相違、徹底的変革である。従つてかの旧説の上に築かれたすべての議論は、よし其全部が反故とならないまでも、その大部分を改廃訂正しなければならない。」^{注37}と結論付けた。

ここで反故にされるべき議論の内、建築に関するものとは、日光の莊嚴は13年に及ぶ工期と諸大名から集められた費用をもとにお構いなしという予算によって始めて実現したとする従来の通説その

ものである。この論文は、本来新たな発見であるから、発見内容の公表だけでも充分意義のある発表であったはずで通説批判は不要である。にもかかわらず、平泉の言説は総じて攻撃的であった。これを、いまだ20代半ばの平泉が「これまで世間に行はれてゐた俗説はいふまでもなく、權威ある學説すらも覆し、ここに日光東照宮の歴史は、其大なる範圍に於て、しかも其最も根本的な要點に於て、著しき改竄訂正を加えねばならなくなった。(中略)而して今や筆を執つて更に普く江湖の批正を仰がんとする」決意故の表現と理解することも可能ではあるが、表題と言い、論調と言い、些か奇異である。^{註38}しかし、そこに信頼すべき発見が存在するのなら、それは認めざるを得ない。少なくとも「誤りたる日光廟」に於ける平泉の主張は、特に本論が検討しようとしている工期とその資金に関する限り、今日に至るまで補強されたことはあっても大きな訂正を受けた事実はない。尤も、平泉の主張の内、総額五十六万八千両及び銀百貫目と米千石という費用は、既に既知の事実であり、たとえそれが「當時の幕府にとって何程の事でもなかった」としても、こと建築に関する限り東照宮の規模から考えて依然として極めて多額であったことに変わりはない。従って、建築界にとっては工期の訂正こそ大きな驚きであったはずである。以下、上記の主張を「平泉説」と呼ぶことにする。

塚本・伊東・関野・大江は誰一人として、この説に対して正式な論評^{註39}を行わなかった。発表されたのは史学雑誌である。日光の荘厳は13年という工期によってこそ可能なものであり、且つそれが「実物ニ於て指摘し得べき」^{註40}のものであるとするなら、その工期が一挙に約1/10に訂正された訳であるから、平泉説に対して少なくとも建築学的にそれは困難であると反論すべきであるし、その可能性を認めるなら建築雑誌に平泉説を紹介すべきである。まさかそんなことがあろうはずはないという思いと、言われてみればその通りかもしれないという交錯した感慨の中で言葉を失ったとも推察されるが、実際のところは解らない。

一方、東照宮の側は大正14年刊行の「日光東照宮修營志」^{註41}では、既に平泉説を採用している。そして、昭和2年12月、かねてより準備が進んでいた「東照宮史」^{註42}が刊行された。山下三次^{註43}の記した序には「本編の主任には、新進鋭才の史學家文學士平泉澄君を囑し、(中略)寶物篇は、日光寶物館の主事にして、斯道の堪能たる古谷清君に、建築篇は、日光大修繕顧問にして、建築界の權威たる大江新太郎君監修の下に、同修繕技師たる小林福太郎君他に託し」とある。そして第四章「造營」の「寛永の造替」には「これは從來普通に寛永元年起工寛永十三年落成と信ぜられて、疑ふ人もなかったのですが、この年月には由々しき誤謬があつて、其寛永十一年十一月に普請に着手し、十三年四月に出来上がったのであります。」^{註44}と、その資金について「金五十六萬八千両銀百貫目・米千石に上つて居ますが、これは全部幕府自ら支出するところであつて、少しも諸大名より徴収した事はありません。」^{註45}と記されている。本書の発行者は東照宮社務所である。「東照宮史」は東照宮が、学識経験者にその評価を委託した上で東照宮が刊行したものであるから、本来東照宮の歴史について学界と東照宮が合意できる範囲を明らかにした公式見解と考えるべき書物である。平泉説は史学雑誌に掲載された後、建築関係者の沈黙の中、東照宮の公式見解となった。

建築雑誌にこの訂正に関する記事が載るのは昭和3年11月の大熊喜邦による「日光東照宮の寛永造替に就て」^{註46}まで待たなければならない。

大熊説

大熊喜邦は「寛永の造替は從來寛永元年に着手して同十三年四月八日に上棟、同月十日に遷宮と一般に信じられてゐた。あれほどの建築であるから十三年を費したとしても無理ならぬことと思つて未だそれに疑を抱くものはなかつた。」^{註47}と通説についての認識を示した上で、それでは林羅山の「東照大権現新廟齋會記」の「去歲初夏に創め、今茲季春に成る」^{註47}という記述と矛盾することを記し、一方東照宮史を「見るとどうしても夫れが事實である様に思われる。」^{註47}と述べた後「私の永年の希望が偶然達せられて、今回甲良家の秘庫を開て有力なる史料を発見することが出来た。其の結果平泉博士が殆ど全く触れなかつた甲良家の記録から東照宮の寛永造替の期間を知る事が出来た」^{註47}こと、そして甲良家文書から「大工方が正月八日に着手し、其の以前の準備期間を加えても前年の暮即ち十一年の暮頃に着手されたものであることを認めなければならない。東照宮史の十一年十一月の着手であるといふ説には誤りなく、從來の傳説である寛永元年の着手は甲良家資料から見ても全く根據の無い訛傳に過ぎないので、作事の主要なる部分は實は十一年正月から十二年三月迄十五ヶ月間に出来上がつてゐる」^{註48}との見解を明らかにした。

その上で「この頃の工事は概して短期間に竣成されてゐるのが通則であつた」^{註49}と述べ幾つかの事例を挙げた後「然しながらかかる短期間に竣成したるものとして茲に疑を存するものはその漆塗工事の工程が餘り少ない事であるが、元禄度の大修繕の際殆んど造替の程度にまで修營した東照宮奥の院拝殿、本殿石の間拝殿竝に本地堂が何れも柱、羽目、床に至るまで、古漆の搔取りから初めて布きせ上塗を終るに至る間約二ヶ月に過ぎない事が、甲良豊前控の『日光東照宮造營日記』に依つて明らかであるから、寛永造替に於ても亦頗る短期間に熟練した職工に依つて其の工程が進められたるものと推定して誤らぬ事であると思ふ。」^{註50}と結んだ。

ここに至つて「通説」は、建築界においても明らかに訂正すべき対象となった。

4. その後の東照宮評価

伊東忠太

昭和12年、その冒頭に「本目録は、伊東博士の夥しき文獻中、博士が重要と認められたるものを以て作成した。」^{註51}と書かれた「日本建築の研究」^{註52}という論文集が出版された。この下巻に「美術より觀たる日光」が大正四年六月「日光」に掲載されたものとして再録されている。これを先に取り上げた「日光」のそれと比較すると、工期について下記の様な相違が存在する。

「日光」で「御承知の通り、三代將軍家光公が、寛永元年より改築に着手されまして、寛永十三年に其改築が落成して居るのであります。」^{註52}と記されていた部分が、「日本建築の研究」では「御承知の通り三代將軍家光が、寛永十一年より改築に着手されまして、寛永十三年に落成しております。」^{註53}に、また「日光」で「社殿の建築は寛永十三年に至るまで、十三年間の繼續工事でありまして(中略)莫大なる費用と、非常なる精力とを以て、十三年間、辛苦

経営の結果終に美事に出来上りました。」^{註54}とされたのが「日本建築の研究」では「社殿の建築は寛永十三年に至るまで、僅かに一年半間の繼續工事でありまして（中略）莫大なる費用と、非常なる精力とを以て、辛苦経営の結果終に美事に出来上りました。」^{註55}にそれぞれ訂正されている。この訂正は、注記や補足を全く伴わない形で行われており、初めて読む者は、大正4年当時、伊東が、既に「平泉説」を知っていたとの印象を持つ内容になっている。おそらく、編集に当たった関係者も同意見であったのだろう。「収載文献は、辭句の訂正の他はなるべく舊態を失はしめないことを原則としたが、伊東博士の御希望により、二三舊稿に補訂を加へられた為、必ずしも發表當時の原文と同一でないものもある」^{註56}という凡例は、伊東自身の要請によって加えられたというよりは、編者の判断で書き加えられたと考える方が適切な表現である。

しかし、訂正後の文章は、上記の様に工期に関する記述の差し替え以外は殆ど原著のままで、しかもそれだけ読めば実はよく筋が通っている。これだけ踏み込んだ評価が、上記の様な訂正の後、少なくともその訂正経緯を知らない限りに於いて充分な説得力を保持している点はやはり注目すべきだろう。

関野 貞

彼は、昭和12年発行の「日本建築史講話」^{註57}では「家光になって、現在の規模の如く建て改められたのであります」^{註58}と述べて、工期には触れていない。この講演は、昭和4年におこなわれたものであるから、大熊説の提出後ということになる。本書の東照宮に関する記述は、工業大辭書の記述から工期と予算に関する記述を削除した内容である。本書は、関野の死後、「工学博士足立康、文部省嘱託大岡實兩氏に囑して厳密な校閲を経て上梓することになった」^{註59}との記述があるから、関野が昭和4年に、武蔵高等学校で語った内容をかなり正確に伝えたものであらうと推察される。従って、工期と予算を含まない理由は、関野の意志であった可能性が高い。また、昭和15年刊行の「日本の建築と藝術」に、工業大辭書に記載された「徳川時代の建築」が「江戸時代」^{註60}と改名されて収録されているが、この校閲も足立と大岡が当たっており、内容は、大正2年の記述のままになっている点にも言及しておきたい。

伊東忠太の場合、「見廟建築の美を論ず」は、通説の下ではあるが、その評価を工期や予算と結びつけた言説ではなかったが、「美術より観たる日光」は、長期に渡る工期と莫大な資金を評価の重要な根拠としていた訳であるから、工期の訂正は東照宮の建築的評価の見直しに及ぶ出来事のはずであるし、工期の訂正が評価に何ら影響を及ぼさないとするなら、逆に「日光」記載の講演録での評価を、一端見直す必要があった。

大熊喜邦の場合、「日光東照宮の寛永造替に就て」^{註46}で甲良家文書から、平泉と同じ結論にたどり着いた訳であるが、それによって彼の東照宮に対する建築的評価が揺らいだ様子はない。

関野貞の場合、「日本建築史講話」の記述を、関野自身がその様に話したとするにせよ、著者の死後、編者によって行われた訂正であるとするにせよ、通説の下で書かれた工業大辭書の記述の訂正版であることに変わりはない。そして、訂正後も、東照宮の建築的評価自体は変更されていない。

そこで、3人の訂正を比較すると、著者の生前死後の発行という相違はあるものの、その訂正方針は実は一致している。それは、工

期の訂正は東照宮の建築的評価には影響を及ぼさないという点に於いてである。

大江新太郎

では修理に関する見解はどうなったのだろうか。最後に、この点を検証したい。大江新太郎は以後公式にこの問題について発言しないうまま昭和10年6月に他界した。寛永造替工期の訂正が、大江の東照宮評価や自らの修理に対する見解に如何なる影響を与えたかは、今日において尚不明である。

13年という工期とお構いなしという予算によってこそ可能であったはずの寛永造替時の姿に辿り着こうとするのが、大江の修理の目的であった訳であるから、通説下での議論の「大部分を改廃訂正しなければならない」^{註61}という平泉の主張は、相当な衝撃であったと推察される。勿論、彼の仕事は修理である。歴史的な問題に対しても、本来は、即物的な調査の過程で文献上の疑問や不明点を明らかにすることであったはずである。しかし、平泉の言説は極めて攻撃的で、修理を担当した大江からすれば、自らの修理が根本から否定された様な印象を与える表現であった。大江の心境は複雑であったに違いないのだが、彼は何も語らなかった。

昭和2年に「東照宮史」と同時刊行された「東照宮寶物志」^{註62}の末尾に額賀大直^{註63}の記した「印行に際して」^{註64}という一文がある。そこには、「東照宮史・東照宮寶物志の二編は、続いて出版すべき東照宮建築志と共に、前々宮司山下三次の時、その編纂刊行を計画せられたもの」^{註65}であったこと、その後、人事移動や多少の増補の必要から修正しつつ「建築志成稿を待ち、共に印版に附せむ」^{註65}としたのだが、関東大震災に遭遇し、東照宮史成稿の一部が焼失したため、その刊行が更に遅れたこと、しかし、それでも遂に「建築志」の同時刊行は出来なかったが「之も遠からず世に公にすることが出来やう」^{註65}と考えていることが書かれている。建築志の監修は大江新太郎^{註66}である。「東照宮史」は、先にも述べた通り、東照宮に関する公式見解と考えるべき書物で、修理に携わった者として、大江は参画を拒むことの出来ない立場にあった。

では、建築志は何時刊行されたのだろうか。この点について昭和32年に発行された「大日光」第8号に下記の様な一説がある。「東照宮寶物志」を書いた小谷清の追想である。それによると「黒板博士・荻野仲三郎両宝物館顧問に委嘱して、宮史・宝物志・建築志の三部作として、宮史は平泉澄氏に、宝物志は不肖の手元で、又建築志は、大江工学士と小林福太郎氏の手元で、それぞれ纏めることになった。（中略）唯、建築志の今に出ないのは、白壁の微瑕とでも言うか。従って三部曲の一つを欠く次第であるが、最早、関係の黒板・荻野・大江・小林の四氏皆世を去られ、如何とも致し難い。」^{註67}東照宮建築志は刊行されなかったのである。^{註68}

歴史的建造物に関する評価において、修理に携わった専門家の見解は、なくてはならない必要項目である。東照宮に関して、当時こうした評価に言及出来た人物は大江新太郎以外にいない。彼の参画なくして建築志の刊行はあり得ない。東照宮は明らかに刊行を望んでいた訳であるから、刊行されなかった理由の多くは、大江の側にあったと考えるのが適当だろう。

修理工事自体に対する批判には、「日光廟修理辯疏」をもって反論を繰り広げたにせよ、その根拠はあくまで「通説」にあった。平泉説の正当性が明らかになるにつれ、彼の脳裏に、度重なる修理と

その風化が複雑に絡み合った今日の姿から自分は果たして自らが主張してきた様に寛永造替の荘厳に肉薄していたのだろうか、更にはそうした姿勢自体が果たして正しかったのかという問が沸き上がってきたことは想像に難くない。極めて攻撃的な平泉の言説と相まって、東照宮寛永造替工期の訂正は、重い荷となって大江の肩に伸しかかったと推察される。しかも、修理は議論ではない。それは多額の予算を要する実務である。結果の訂正は、少なくとも次の修理までは出来ない。担当者にとっては事実上生涯一度の仕事である。勿論、これは修理の宿命である。「平泉説」は、よく読めば、大江の修復結果に直接疑義を差し挟むものではないし、大熊も元禄修理から逆に推定して「寛永造替に於ても亦頗ぶる短期間に熟練した職工に依つて其の工程が進められたるものと推定して誤らぬ事であると思ふ。」^{注69}と述べて、工期の訂正が東照宮の仕様への疑義ではないことを指摘している。訂正によって、大江の修理自体に新たな疑義が差し挟まれた訳ではない。しかし、大江自身がその様に考えることが出来たかと言えば、そこには疑問が残る。

5. 結 論

以上、大正期における寛永造替工期の訂正と東照宮評価の変遷を検証した。大正期に於ける寛永造替工期の訂正は、建築界にとって、工期に言及し建築の評価を相対化することの意味を問うものであったとするのが適当である。これに対する建築界の対応は、歴史的記述に関しては、結果を見る限り、工期の訂正は東照宮自体の建築的评价には影響を与えないというものであった。換言すれば、工期と建築的评价是相互に独立した関係にあるとの見解であった。尤も、建築雑誌を通観する限り、この見解が一般論として、学会での議論や調査から生まれた形跡はない。寧ろ、あくまで東照宮に関する問題であり、大熊喜邦の「日光東照宮の寛永造替に就て」が、この問題に対しても見事に対応したと言った方がよいだろう。

一方工期の訂正が修理の評価に与えた影響に関しては、いろいろな可能性が指摘できるが、全て推論の域を出ない。寧ろ、東照宮建築志が刊行されなかった事実から、公式な見解の提出は、次の昭和の大修理まで先送りされることになったとするのが適切である。

6. 補 足

6. 1 平泉が「通説」を否定した根拠について

平泉は「通説」の内「『日光山東照宮造営帳』の発見以降も猶崩壊しなかった諸項は、幕府の老中もしくは秋元・松平の兩人によって連署せられた所の、寛永元年正月より同三月に至る間の五通の文書」(史学雑誌第三十二編第二號P88)以外にないことを確認した上で、この五通の文書は、その日付・他の文書との比較等から、後の偽作であるとし、その上で関連資料を精査し、寛永造替は寛永十一年十一月に始まり同十三年四月に竣功したとの見解を示した。

6. 2 「東照宮史」第四章造営について

本論の目的は寛永造替工期の見直しであり、この点に関しては「誤られたる日光廟」が初出であり、それが「史学雑誌」に掲載された点を考慮し、「東照宮史」(第四章造営)を「誤られたる日光廟」で示された「平泉説」が、東照宮の公式見解になった点に焦点を当てて扱った。

一方内容的には、寛永造替工期について(「東照宮史」第四章造営・註七)のみならず、後の修理を含めた東照宮造営の全体象に対する記述としても、「東照宮史」の方が、より客観的で充実したものになっている。

7. 謝 辞

本論執筆の過程で、東洋大学図書館個性形成委員会委員長小池喜明東洋大学文学部教授他委員各位から、実に多くのしかも貴重な助言を頂きました。

ここに心から御礼を申し上げます。

ありがとうございました。

注及び参考文献

- 注-01 「日光廟建築」 昭和19年 9月 彰國社
 注-02 「江戸建築叢話」昭和22年10月 東亜出版
 注-03 「神佛分離史料」巻中(大正15年11月発行)
 「日光における神佛分離」P760～
 尚「神佛分離史料」巻上例言冒頭に「東照宮三百年祭記念會の研究費補助によって成れるものである」との記述がある。
 注-04 大正15年10月発行の石井研堂著「増訂明治事物起源」の「東照宮の祭典」に「明治五年春令して、東照宮例祭、維新後中絶の處、自今、幣使參向を仰せ付け、同年六年六月九日、下野國日光鎮座の東照宮、別格官幣神社に陞格せらるる(同年八月十四日京都の豊國神社も同格に改めらる)破却されはせずやと懸念せし程の東照宮が陞格されたるなれば、信徒は大ひに喜び、東京上野及芝兩所の東照宮にて、同年九月大祭典を執行せり云々」とある。
 尚、明治41年の初版には、東照宮に関する記述はない。
 注-05 「徳川慶喜公傳」男爵澁澤榮一著 龍門社発行大正6年発行
 澁澤榮一自序より P19
 注-06 同上P27
 注-07 同上P33
 注-08 東京帝國大學紀要工科第壹冊第貳號 明治36年5月発行
 東京帝國大學
 注-09 同上P13
 注-10 「日本の建築と思想 伊東忠太小論」平成 8年4月発行 同文書院
 注-11 「詩人などは見山など書く」と南摩綱紀が「太陽」第1巻第7号の「日光」に記している。(P88)
 注-12 「日本建築の研究」の序に「本目録は、伊東博士の夥しき文獻中、博士が重要と認められたるものを以て作成した。」とある。そして、兩論文とも記載されている。
 注-13 國華第十七編第二百號 P533
 注-14 同上 P541
 注-15 「日光」 大正4年6月発行 東京印刷
 注-16 小引に「本書収むる所は、大正四年二月十七日、並に十八日の兩日、東京南葵文庫に開かれたる、本協會第二回講演會に於いて講演せられし、専門各大家の講演筆録を以て主となし、末尾に特別の寄稿一篇を以てす。」とある。
 講演會は2日間に渡って行われたのだが、日程は以下の通りである。
 第1日目 公園國の一大公園としての日光 徳川 達孝
 歴史より観たる日光 辻 善之助
 日光の地質 井上禧之助
 植物学上より観たる日光 白井光太郎
 第2日目 日本の精華としての日光 徳川 頼倫
 動物学より観たる日光 渡瀬庄三郎
 美術より観たる日光 伊東 忠太
 注-17 当日は、徳川頼倫も出席しており東照宮批判が期待された講演會ではない。
 注-18 「日光」 P152
 注-19 「日光」 P156
 注-20 「日光」 P161～P163

- 下記の9項目
社殿の配置は、緊密にして散漫なるべからず
自然の地形に従ひ樹木は可成之を保存すべし
社殿の構造は耐久的なるべし。
同時に又耐火、耐寒、耐湿たるべし
建築物の形式、手法は、箇々の形を考へずして、全体としての体裁を考ふべし
細部の意匠は、斬新なる独創的のものなるべし
装飾に全力を注げ、苟も建築に適用し得る工芸は、悉く之を応用せよ
工費には御構いなし、工費を慮りて、意匠を粗略にすべからず
規模は大なることを要せず、只精巧優美ならんことを要す
- 注-21 「日光」 P 163～P 164
- 注-22 伊東の講演は二日目、即ち18日に行われたのだが、第1日目に講演を行った辻善之助は、家康の晩年を概説し東照宮建立の経緯を説明した後、最後にこう述べている。
「要するに、『日光には小さい堂を建てよ。八州の鎮守とならむ。』それが家康公の本意でありませう。今日のやうな立派な堂が建つて居るのは家康公の本意ではなからうと思ふ。(中略)しかし家康公の本旨は、固より小さい堂を立てるといふだけの事であつたにしても、三代將軍の時になつては、お祖父さんを尊敬するの餘り、思ひ切つた極彩色の物を造つて、関東の鎮護たらんとの遺旨に副はんとせられたことも、亦併せて考へられるのであります。それから今の東照宮が、立派に造営せられて、今日世界の日光となった。其建築の事等に就いては尚ほ、明日伊東博士から、御話があらうと思ひます。私は是で終わりました。」
彼は、現在の東照宮は家康の本意ではなく家光の意志によるものであるとの見解を披露している。この発言によって建築としての東照宮は家康の意志とは分離されている。
ところで、「辻善之助博士自歴年譜稿」昭和52年9月発行(平文社)の「思ひ出づるまま」に伊東忠太に関する記述がある。それによると辻善之助が、学会で交流のあった伊東忠太に文科大学での講義を依頼したこと、この講義は実に好評で、伊東の洋行後、関野貞に引き継がれた等の記述があるから、両者は懇意であった。
- 注-23 「趣味の建築叢話」大正10年1月発行 鈴木書店
「建築上より見たる日光廟」(P 73～P 86)は
日光廟の建築史上の位置
廟建築の性質と日光廟
日光廟造営の目的
造営職工の召集
日光廟の建築
建築の工賃と賦役の模様
日光廟の國寶的價值 の7節からなる。
初出は大正9年7月とあるがその掲載を確認出来ないので大正10年の記述として取り扱う。
- 注-24 同上 P 73
- 注-25 同上 P 76
- 注-26 同上 P 80～81
- 注-27 工業辭書 第四卷 「徳川時代の建築」 大正2年9月発行同文館
- 注-28 同上 P 3092～P 3093
- 注-29 同上 P 3093
- 注-30 「日光東照宮精算書」明治45年6月～大正2年8月まで
建築雑誌に断続的に15回連載
- 注-31 同上 建築雑誌第306号 P 255
- 注-32 「日光廟修理辯疏」大正4年10月～大正5年3月まで
建築雑誌に断続的に5回
- 注-33 「日光廟修理辯疏(一)」建築雑誌 第346号 P 728
- 注-34 同上 P 733
- 注-35 同上 P 730
- 注-36 「史学雑誌」第32編第2号 大正10年2月発行 P 83
尚、この論文ばかりに注目しがちであるが、もう一つ同年6月に同じく史学雑誌に「徳川家康の遺金」という論文を発表しており、この2つは、一連の論文として扱う必要がある。

- 注-37 「誤られたる日光廟」史学雑誌第32編第2号
P 110～P 111
- 注-38 同上 P 84
平泉は「抑々神社寺院の生命は其信仰にある。しかるにこの脈々たる生命の躍動に氣付かず、力ある祈祷の声を聴く能はざるとき、其歴史は遊戯化されてすべて便宜的なものとなる。これは史家にとって最も恐るべき事である。何となればこれ神聖なる人生の冒瀆であり、森厳なる歴史の反逆であるからである。予は従来最も政略的便宜的なものと思われてゐた日光廟にさえ、將軍家光のこの至純熱烈なる信仰を見出し、悉く旧説を覆し得た事を、我等の歴史の莊嚴の為に、自ら歎喜に堪えないものである。」と締めくくった。彼の感傷的な、そして些か攻撃的な東照宮觀が、いやむしろその史觀が、危機を孕んでいたことを推察させる結びである。しかし、それは、今日の視点で、当時その様に理解されたか否かは解らない。
- 注-39 建築雑誌にも史学雑誌にも掲載されなかった。
その他、当時の建築系の主要雑誌の目次を通観した限り、平泉説の紹介も批判も見出せない。
- 注-40 注-09参照
- 注-41 「日光東照宮修營志」大正14年6月26日発行
日光東照宮寶物館主事古谷清著 東照宮社務所
- 注-42 「東照宮史」昭和2年12月25日発行 東照宮社務所
- 注-43 この序は大正10年10月に記されたもので同氏は当時の東照宮宮司
- 注-44 「東照宮史」P 46～P 47
- 注-45 同上 P 47
- 注-46 「日光東照宮の寛永造替に就て」建築雑誌第515号 論説冒頭に「本稿は昭和三年六月八日建築學會の講演會にて講演せるものに多少追補したものである。」とある。
- 注-47 同上 P 1179
- 注-48 同上 P 1186～P 1187
- 注-49 同上 P 1188
- 注-50 同上 P 1189
- 注-51 「日本建築の研究」昭和12年3月 龍吟社発行 上巻 P 5
- 注-52 「日光」(注-15) P 153～P 154
- 注-53 「日本建築の研究」(注-51) P 288
- 注-54 「日光」(注-15) P 156
- 注-55 「日本建築の研究」(注-51) P 289～P 290
- 注-56 同上 P 10 凡例
- 注-57 「日本建築史講話」昭和12年7月29日発行 岩波書店
- 注-58 同上 P 193
- 注-59 同上 冒頭凡例部分 第2項
- 注-60 昭和二年のアルス大建築講座と大正2年の工業大辭書とを合わせて、通史を構成したものである。
「訂正を要すべきところも多いが、(中略)原本のままとすることにした。」との記述がある
- 注-61 「誤りたる日光廟」(注-37) P 110
- 注-62 「東照宮寶物志」昭和2年12月25日発行
執筆に当たったのは古谷清
- 注-63 「印行に際して」は昭和2年初冬とあり
同氏は当時の東照宮宮司
- 注-64 同上 奥付前
- 注-65 「印行に際して」より
- 注-66 注-44を参照
- 注-67 「新日光山志抄」大日光第8号 昭和32年5月 P 6
- 注-68 東照宮建築志と呼ぶべきものを私達が目にするのは、戦後の昭和の大修理に携わった大河直躬の「秘宝 第十二巻 日光東照宮」(昭和44年)、今日私達がSD選書で読んでいる「東照宮」の原本まで、なかったことになる。
- 注-69 注-50を参照

(2003年7月3日原稿受理、2003年8月8日採用決定)